ハングルがきざまれた石塔の謎

館山市にある大厳院には、４つの面にそれぞれちがった文字で「南無阿弥陀仏」ときざまれた「四面石塔」という石の供養塔があります。浄土宗では、人は「南無阿弥陀仏」と唱えることで阿弥陀仏の力によって苦しみから救われ、極楽浄土に導かれるといいます。なぜ、４つの面に４種類の文字できざまれた石塔があるのでしょうか。

石塔にきざまれた４つの文字

石塔の東面は、朝鮮国でつくられた旧字体のハングルです。西面には、いまも印鑑などに使われている篆字というむかしの字体の漢字です。南面は、いまわたしたちが使っている漢字です。そして、北面には、インドで使われていた梵字（サンスクリット文字）がきざまれています。

ハングルは、1446年に朝鮮国の第４代国王世宗がつくらせた文字です。しかし、この石塔にきざまれているハングルは、16世紀まで使われた旧字体で、四面石塔がつくられた17世紀には、すでに使用されていない字体なのです。韓国内ではこのような旧字体がきざまれた石碑は現在見つかっていません。ハングルひとつとっても貴重な文化財であり、韓国からも注目されています。

石塔にあるハングル

この四面石塔から、どんなことが読みとれるでしょうか。「南無阿弥陀仏」のまわりにきざまれた文字がヒントになります。北面の梵字の「南無阿弥陀仏」の右側には、石塔を寄付した夫婦の名前、そして亡くなったときにつけられる戒名がきざまれています。また、左側には石塔を建てた年代と当時の大厳院の住所、お坊さんの名前とサインがきざまれています。

まず、この石塔は建てられた時代に何らかの理由で亡くなった人びとを供養するためにつくられたのではないかと思われます。理由は南面の漢字できざまれた「南無阿弥陀仏」の両側に、お経の言葉がきざまれているからです。その意味を調べると、「亡くなった人たちがいまも仏さまになれずに地上で霊魂のままさまよっている。お経をあげることができれば仏さまになる」と

四面石塔、高さ２メートル19センチ

いうのです。さまよっている霊魂を供養したいという思いを強く感じます。

東面には旧字体のハングルがありますが、なぜハングルをきざむ必要があったのでしょうか。石塔をつくらせた人が朝鮮国に関係あったのではないかと考えられます。建てられたころに使われているハングルとはちがった字体なのですが、16世紀中ごろの阿弥陀経の書物のなかに、四面石塔とまったく同じ旧字体のハングル活字で印刷された「南無阿弥陀仏」が見つかりました。この四面石塔にきざまれたハングル字体と、まったく同じような活字体だったのです。

どのようないきさつで、その書物が日本にきたかを考えてみましょう。書かれた年代から推定して、一番可能性がある出来事は、16世紀後半におこった豊臣秀吉による2度におよぶ朝鮮国への侵略です。秀吉軍は、当時の日本にはなかった貴重な美術品や工芸品、仏教に関する書物や活字などをうばいました。さらに文化財だけでなく、とくに陶磁器をつくる技術者などを家族ごととらえ、無理やり日本に連れてきました。

朝鮮国側では李舜臣がひきいた水軍が活躍をし、戦争後半には秀吉軍の侵攻を阻止しました。また、民衆の戦いも高まって、秀吉が考えていたようには進みませんでした。結局、秀吉軍が敗北を続けるなか、秀吉の病死によって秀吉軍は全面的に撤退することになったのです。

四面石塔にきざまれた文字

供養のために石塔建立

江戸幕府ができると、朝鮮に出兵していなかった徳川家康は、すぐに朝鮮との国交を回復させ、友好関係をつくる努力しました。そのため朝鮮から大規模な外交使節団である朝鮮通信使を受け入れていくことになります。このとき朝鮮国は国交を回復させる条件として、無理やり連れていった朝鮮の人びとを見つけ、外交使節団とともに帰国させることをもとめました。

四面石塔の北面にきざまれている年号の「元和十年」（1624年）は、朝鮮から第3回目の外交使節団がきた年でした。このとき3000人近くの朝鮮の人びとが帰国したとの記録が残っています。また、きざまれている年号は、秀吉の朝鮮侵略の戦争から33回忌になる年で、仏教では死者を供養する区切りの年にあたっています。このことから朝鮮国の人びとを供養するためにつくった石塔ではないかと考えられます。

石塔の北面には、この石塔をお寺に寄付をした「山村茂兵」という名前や、「建譽超西信士」「栄壽信女」という死後につけられる戒名がきざまれています。しかし最後の部分には「逆修」の文字があり、生きているときにお坊さんから戒名をもらう儀式がおこなわれたこと、つまり生きている夫婦が亡くなる前にお葬式をしたということがわかります。

なぜそのようなことをしたのでしょうか。秀吉軍に連れてこられた朝鮮人の夫婦が、帰国する前に戦争や日本で亡くなった朝鮮の人びとの供養をお坊さんにお願いしたと考えられるのです。

雄譽と平和へのねがい

戒名をさずけたお坊さんを調べてみました。北面にはこの四面石塔のある「大巖院」というお寺の名と、そのお寺の「雄譽」というお坊さ

んの名前がきざまれています。雄譽という人物は、雄譽霊巌上人と呼ばれ、この館山市（当時は房州大網村）に大巌院をつくったお坊さんでした。

いまも千葉市に大巌寺というお寺がありますが、雄譽はそのお寺でお坊さんになりました。秀吉の時代には住職となって徳川家康と深いつながりを持っていました。大巌寺はお坊さんを養成する学校で、人びとからもあつい信仰を集めていました。のちに江戸幕府は、キリスト教徒をおさえるために仏教の力を利用しますが、そのために大きな役割をはたした雄誉は、浄土宗総本山の京都知恩院の住職になっています。

四面石塔には、石塔のなかにきざまれた文字以外、なにも資料がありません。しかし、当時の人びとがどんな時代に生きていたかを調べたり、きざまれた文字をつうじて石塔をつくった意味を考えることはできます。

大巌院（館山市大網）

ハングルがきざまれ、江戸時代の日朝交流の姿や平和へのねがいが感じられるところから、2002年の日韓交流年には、日本と韓国の研究者たちが集まり話し合いをしました。謎だらけですが、あなたも「四面石塔」を調べてみませんか。

（愛沢伸雄）